2021年度受贈の車馬・酒宴・楼閣画像石拓本について

下　野　玲　子

はじめに

2021年度、当館は古美術店壺中居の取締役社長であった宮島格三氏より、後漢時代の武氏祠・孝堂山石祠を含む画像石・石碑の拓本合計55点を受贈した。これらは壺中居の創業者の一人である廣田不孤斎（本名松繁、1897～1973）が中国で現地の職人に採拓させたものと伺っている。その内訳は**表１**の通りである。

表1　2021年度受贈中国画像石・石碑拓本一覧

連番	収蔵番号	名　称	原石の制作年代	形　態	寸法（㎝）	備　考
1	BS-1	武氏祠　前石室第五石	後漢・建寧元年（168）頃	裏打ち	50.3 × 201.3	上方三角部分欠損
2	BS-2	武氏祠　前石室第七石	後漢・建寧元年（168）頃	裏打ち	78.1 × 201.3	
3	BS-3	武氏祠　前石室第九石	後漢・建寧元年（168）頃	裏打ち	32.3 × 156.6	
4	BS-4	武氏祠　前石室第十二石	後漢・建寧元年（168）頃	裏打ち	32.4 × 159.0	
5	BS-5	武氏祠　後石室第二石	後漢・建和２年（148）頃	裏打ち	103.4 × 139.6	
6	BS-6	武氏祠　後石室第六石	建和２年（148）頃	裏打ち	31.5 × 229.6	
7	BS-7	武氏祠　後石室第七石	建和２年（148）頃	裏打ち	64.4 × 202.1	
8	BS-8	武氏祠　祥瑞図第二石	後漢・元嘉元年（151）	裏打ち	64.6 × 210.8	
9	BS-10	武氏祠　祥瑞図第三石	後漢（2 世紀）	裏打ち	72.3 × 64.1	
10	BS-11	武氏祠　武梁祠第二石部分	後漢・元嘉元年（151）	裏打ち	60.1 × 137.3	上方三角部分と下半分は欠損
11	BS-22	武氏祠「武家林」題字	漢より後	裏打ち	50.4 × 15.1	
12	BS-24	武斑碑	後漢・建和元年（147）	軸装	114.9 × 65.1	
13	BS-25	武斑碑碑額	後漢・建和元年（147）	軸装	39.0 × 31.9	BS-24 と 25 は同一表具に表装
14	BS-23	武氏祠「武氏碑」刻字（武斑碑碑陰）	漢より後	まくり	50.2 × 29.4	
15	BS-21	重立漢武氏祠石記①	清・乾隆 52 年（1787）	まくり	32.2 × 87.4	
16	BS-15	重立漢武氏祠石記②	清・乾隆 52 年（1787）	まくり	32.0 × 86.2	
17	BS-13	重立漢武氏祠石記③	清・乾隆 52 年（1787）	まくり	32.6 × 87.4	
18	BS-16	重立漢武氏祠石記④	清・乾隆 52 年（1787）	まくり	31.6 × 87.0	
19	BS-14	重立漢武氏祠石記⑤	清・乾隆 52 年（1787）	まくり	31.5 × 86.8	
20	BS-17	重立漢武氏祠石記⑥	清・乾隆 52 年（1787）	まくり	32.0 × 89.0	
21	BS-18	重立漢武氏祠石記⑦	清・乾隆 52 年（1787）	まくり	32.4 × 93.9	
22	BS-12	清重立漢武氏祠石題記	清・乾隆 57 年（1792）	まくり	32.2 × 86.3	
23	BS-20	武氏名諱題字	清・乾隆 57 年（1792）	まくり	32.0 × 47.2	
24	BS-19	重修武梁祠石室記	清・光緒 6 年（1880）	まくり	64.6 × 92.0	
25	BS-26	孝堂山石祠　東壁	後漢（1 世紀）	①まくり ②まくり	① 84.0 × 63.3 ② 3.2 × 8.0	①右部分 ②東壁全体の 10 分の一ほどの断片
26	BS-27	孝堂山石祠　後壁東側	後漢（1 世紀）	まくり	107.2 × 182.3	

連番	収蔵番号	名　称	原石の制作年代	形　態	寸法（㎝）	備　考
27	BS-28	孝堂山石祠　後壁西側	後漢（1 世紀）	まくり	105.1 × 182.0	
28	BS-29	孝堂山石祠　東壁	後漢（1 世紀）	まくり	114.5 × 196.1	下部欠損
29	BS-30	孝堂山石祠　西壁	後漢（1 世紀）	まくり	149.1 × 198.8	下部欠損
30	BS-31	孝堂山石祠　隔梁東面	後漢（1 世紀）	①裏打ち ②まくり	① 73.3 × 197.3 ② 56.2 × 106.8	②は中央部のみの断片
31	BS-32	孝堂山石祠　隔梁西面	後漢（1 世紀）	まくり	74.2 × 186.6	
32	BS-33	孝堂山石祠　隔梁底面	後漢（1 世紀）	裏打ち	33.9 × 182.8	
33	BS-34	孝堂山石祠　前面石柱	後漢（1 世紀）	まくり	33.1 × 113.9	
34	BS-54	隴東王感孝頌 （孝堂山石祠西壁外側）	北斉・武平元年（570）	まくり	125.2 × 223.2	隷書、碑額なし。末尾に小字で唐開元 23 年（735）の楊傑の題記あり
35	BS-35	重修漢孝子郭公祠記	清・乾隆 22 年（1757）	まくり	141.8 × 35.2	
36	BS-36	画像石（車馬その他）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	54.5 × 77.8	山東省滕州市宏道院出土
37	BS-37	画像石（西王母）	後漢（1 ～ 2 世紀）	裏打ち	68.1 × 69.5	山東省滕州市西南郷出土
38	BS-38	画像石（東王父、百伎など）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	68.4 × 164.0	山東省滕州市宏道院出土
39	BS-39	画像石（西王母、車馬）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	71.5 × 69.0	山東省滕州市西南郷出土
40	BS-40	画像石（龍、百伎など）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	91.8 × 76.4	山東省滕州市宏道院出土
41	BS-41	画像石（弓射、龍）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	68.6 × 84.6	山東省滕州市出土
42	BS-42	画像石（双魚その他文様）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	68.5 × 121.5	山東省滕州市東北崖頭出土
43	BS-43	画像石（菱形文様）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	34.6 × 52.4	山東省出土
44	BS-44	画像石（龍文部分）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	51.5 × 33.8	山東省滕州市出土
45	BS-45	画像石（人物、獣、鳥）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	46.4 × 38.0	山東省滕州市出土
46	BS-46	画像石（双魚その他文様）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	43.9 × 201.3	山東省滕州市宏道院出土
47	BS-47	画像石（交龍）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	44.8 × 200.1	山東省滕州市出土
48	BS-48	西王母・冶金画像石	後漢（1 ～ 2 世紀）	裏打ち	79.4 × 141.8	山東省滕州市宏道院出土
49	BS-49	画像石（獣、車馬など）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	82.8 × 157.0	山東省滕州市宏道院出土
50	BS-50	画像石（鳥、獣）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	14.0 × 91.3	山東省滕州市出土
51	BS-51	画像石（獣）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	13.1 × 92.3	山東省滕州市出土
52	BS-52	画像石（鳥、魚）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	13.1 × 117.8	山東省出土
53	BS-53	画像石（璧）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	69.4 × 67.0	山東省滕州市東北崖頭出土
54	BS-55	画像石（双闕楼閣など）	後漢（1 ～ 2 世紀）	まくり	76.0 × 202.0	山東省滕州市宏道院出土
55	BS-9	車馬・酒宴・楼閣画像石	後漢（1 ～ 2 世紀）	裏打ち	92.3 × 128.2	山東省出土

収蔵番号を付した後に検討作業を行い関連作品ごとにまとめたため、表1は番号が連続していない。画像石の発見場所別に分類すると以下のようになる。

（1）武氏祠関連……山東省嘉祥県の武氏祠画像石（後漢）10点、武斑碑および同碑碑額（後漢）各1点、武梁祠立柱・武斑碑碑陰に後世刻まれた文字各1点、武氏祠に清時代に建てられた石碑11点。

（2）孝堂山石祠関連…山東省済南市長清区の孝堂山石祠画像石（後漢）9点、北斉・清の刻字各1点。

（3）その他の画像石…山東省滕州市出土画像石17点、出処未確認画像石3点、ほか1点（いずれも後漢）。

その他の画像石については、「京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料」画像石データベース[註1]と文物図像研究室漢代拓本整理小組編『中央研究院歴史語言研究所蔵漢代石刻画象拓本目録』（台湾・中央研究院歴史語言研究所、2002年）、および魯文生主編・山東省博物館編『山東省博物館蔵珍・石刻巻』（山東文化音像出版社、2004年）

と照合したところ、大部分が山東省滕州市出土画像石であることが判明した。これらの資料に「山東」としか記載のない拓本2点も彫刻技法や文様の形状から見ておそらく滕州市出土画像石の一部である可能性が高い。ただし、表の最後に掲載した収蔵番号 BS-9（**図 1**）は受贈時に武氏祠画像石のまとまりの中に入っていたため武氏祠画像石の並びで番号を付したものの、調査を進めると武氏祠画像石ではなく、滕州市画像石群の中にも見出せず、孝堂山石祠にも含まれないものであった。そこで本稿ではこの画像石拓本について紹介し、画像内容について若干の考察を試みたい。

1. 作品の概要

本拓本の寸法、状態は以下の通りである。名称は画題内容から当館で便宜上付けたものである。

名称：車馬・酒宴・楼閣画像石

原石の制作年代：後漢時代（1～2世紀）材質・形状：紙本墨拓、裏打ち

寸法：縦92.3㎝、横128.2㎝

画面は上下に３層の区画が設けられ、第３層は第１・２層よりやや縦が長い。第１層から下へ順次図像を辿ってみたい。

◆第１層

向かって右から左へと進む車馬出行図である。左端に迎えの２人物が立ち、腰をかがめて車馬を待ち受け、左上端に「亭長」と読める榜題がある。左側の人物は顔の前に笏を掲げて持ち、右側の人物は楯を横たえて正面に向けて持ち、楯の上部に笏の先端が見えている（**図2**）。楯は中央でやや折れ曲がっている。楯を持つ方は武冠の一種である籠冠を被るので武官であり、左側は進賢冠を被るため文官であろう[註2]。林巳奈夫氏の研究によると他の画像石の車馬出行図にも出迎えの人物像を見ることができ、文官だけの場合、武官だけの場合、両方の場合があるようだが、武官の場合に楯を横たえて正面を見せて持っている例がある[註3]。例えば山東省泰安県（現在の泰安市）城外乾家堡出土の画像石には楯を持ち腰をかがめて車馬の行列を待ち受ける人物が描かれ、しかも「寺門亭長迎」（寺門の亭長迎う）の榜題がある（**図3**）。「寺門」は役所の門という意味である。他にも車馬の出迎えあるいは見送りの人物に「亭長」の題記を付した作例がいくつか知られている[註4]。亭長は一定の距離ごとに置かれた宿駅の役人の長で、盗賊を逮捕する役職であり、楯を持つ武官として表現されるのがふさわしく、榜題「亭長」はこの楯を持つ武官の方を指すと考えられる。清時代の学者・瞿中溶は亭長が楯を持つことについて『後漢書』逢萌伝の次の一節を引いており、亭長の図像が楯を持つことの証左となる[註5]。

> 家貧、給事県為亭長。時尉行過亭、萌侯迎拝謁。既而擲楯歎曰＜注、亭長主捕盗賊、故執楯也＞、大丈夫安能為人役哉。[註6]
>
> （家貧しく、県に給事し亭長となる。時に尉行きて亭を過ぎ、萌侯迎えて拝謁す。既にして楯を擲って歎じて曰く＜注、亭長は盗賊を捕うることを主る。故に楯を執るなり＞、大丈夫いずくんぞよく人のために役せられしや、と）

亭長の前には並列する騎馬２組が先導する１頭立ての馬車、その次も１頭立ての馬車が続き、最後尾に正面向きの騎馬１組が佇んでいる。前の馬車は蓋（パラソル）があるだけの2人乗りの車で、林巳奈夫氏の車馬研究に従えば後漢時代の官吏が乗る「小車（安車）」に当たる[註7]。後ろの馬車は蓋に加え左右両側に高い覆いがある「軒車」である[註8]。２番目の馬車と正面向き騎馬の中間上方に「督□車」と読める榜題がある。□は右がおおざとに見えるため「郎」もしくは「郵」の可能性が考えられるが、前者は該当する官吏名がなく、後者は左下の画数が足りな

図1　BS-09車馬・酒宴・楼閣画像石

図2　BS-09第１層左側「亭長」部分

図3　乾家堡画像石「寺門亭長迎」部分
京都大学人文科学研究所蔵

いように見える[註9]（**図4**）。後ろの馬車に乗る人物がこの画像石の墓もしくは祠堂の主人で、そのため榜題をともなっているのであろう。また迎えの右側人物の上方、2台の馬車の間、2番目の馬車の馬の上方の3か所に飛鳥が各1羽、2番目の馬車の馬の下に蹲る鳥が3羽、1台目の馬車の馬の上部空間に1 蟾蜍があらわされている。さらに、下方の地面には楯を持つ亭長と先頭の騎馬の間に方形の出っ張りがあり、上に鉢のような器が載っているが、何を意味するか不明である[註10]。

図4　BS-09第１層右側榜題

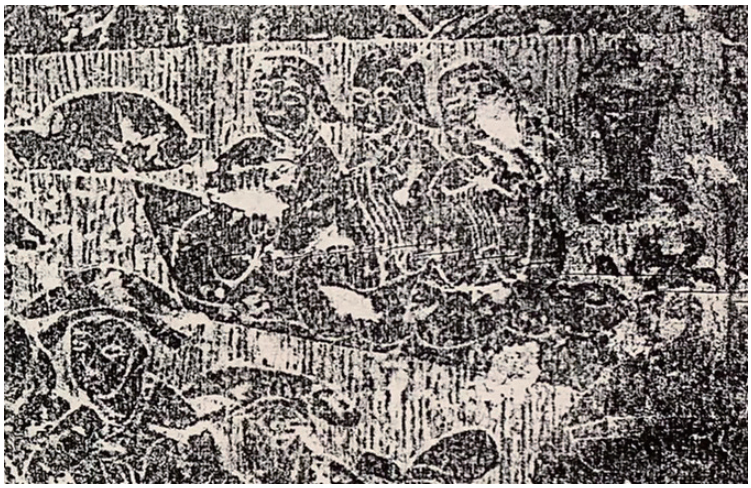

図6　BS-09第２層右上部

図5　BS-09第２層右側酒宴

◆第２層

向かって左方に低い塀に囲まれた家屋が１棟あり、右方は酒宴の様子である。その中間に進賢冠を被る文官風の4人物が立ち､酒宴側の１人が宴会の方に左手を差し伸べ､２人を振り返って宴会に案内するような仕草をしている。左方にある家屋は通常見られるような正面向きではなく、一方の角を正面として俯瞰して表現されている。１階建てで、屋根の形は宝形造りのように中央の頂部から4本の棟が放射状に延び、頂部に迎月形の装飾が載っている。屋根の内部は見づらいが､軒先に浅いＵ字形の円弧が並んでいることから瓦葺と思われる。建物は低い塀に囲まれ、塀も一方の角を正面にして俯瞰して描かれるため、全体として菱形に表現されている。塀の内側、家屋の左右端には外を向いた人物の上半身があらわされている。屋根の左右稜線上に鳥が各1 羽とまり、下をのぞき込んでいる。塀の左下には体を低くかまえた猿猴か鼬のような細身の獣の上半身、右下には胴が楕円形に膨らんだ瓶のごとき器が2個置いてある。瓶のくびれた頸部に布の切れ端のような突出部があり、口を布で覆って栓をしているのではないかと推測される。この建築が何を指すか明確でないが、仮にもし倉だとすれば、膨らんだ2 瓶は右方の酒宴で供されるために出された酒の容器であろうか。

右方の酒宴部分（**図5**）は、奥の低い台上に１人が坐し、その上に帳が括られているのでこれが酒宴の主という可能性もあるが、大きさは他の人物と変わらず、とくに区別されてはいないようである。そこから左右それぞれに斜めに敷物（席）が敷かれ、左側に5人、右側に6人の人物が坐しているのが確認できる。左側の人物の一部ははっ

きりしないが、ほとんどが両手を袖に入れ拱手しているようである。冠は四種類見分けられるが、中間に立つ4人の進賢冠とは異なる。彼らの前には耳杯と皿が複数、足付きの盆である案が置かれ、手前右寄りに置かれた上に勺（匙）を伴う鉢状の器は酒の容器、銅と思われる。中間手前は石の傷が多く見づらいが2 人物が坐し、それぞれ席に坐す人々に向かって片手を差し出しているところから給事係もしくは舞人の可能性がある。右上にはひときわ小さい3人物が席に坐している（**図6**）。長い頭髪を後ろに撫でつけ冠を被っていないように見えるため身分の低い人物かもしれないが、両手は拱手して袖に隠されている。右端に1 人物が立っているが、こちらは胸前に鉢を抱えており、給事の使用人と思われる。右上角には上広がりの円筒状の物が置かれ、下には円形の台、頂部中心に突起があるため、燈火をともすための燭台と思われる。

◆第３層

この層はほぼ中央で左右に二分されている。左方は他の画像石によく見られる２階建ての楼閣と左右の闕で、楼閣の１階部分と２階部分にそれぞれ 2 人物が坐している。楼閣の大棟上には２羽の大鳥が向かい合ってとまり、屋根上にはほかに3鳥がとまる。左方の闕の屋上（**図7**）に両耳の突き出た鴟鴞（しきょう）（梟）が2 羽、前足の長い猿猴、四足獣（猿猴かもしれないが足が長くない）が各1 いる。鴟鴞、猿猴、鳥は画像石の建築上によく見られる鳥獣である。右方の闕はスペースの関係か左半分だけ描かれ、右側は直線的に切断された表現になっている。前足の長い猿猴2 匹と頭を突き出す鳥1 羽があらわされる。左闕のさらに左にも建築の屋根が見え、1 鳥がとまっている。その下に低い武冠らしい冠を被った2 人物が立ち、武器は見えないが門衛と思われる。左闕の右側にも2 人物が立つが、こちらは別の冠を被り、ある程度身分のある人物のようである。右闕の左側には低いかぶりものを被り鉢を捧げた使用人が1人立つ。楼閣の屋根には円弧状の刻線と等間隔の縦の直線が見られ、また闕の屋根の軒先に円弧が見えることから、どちらも瓦葺建築の表現がなされている。

右方には、第２層向かって左側にある建物と同類の塀で囲まれた建築がある。第２層よりも大きく、屋根上には瓦葺をあらわす二重の円弧の連なりが明瞭に見える。頂部は第２層の建物と異なり、煉瓦を円筒状に置いて何壇も積み上げたような不思議な形状のものが載り、その中心に両耳のある鴟鴞が顔を出している（**図8**中央）。現段階

図7　BS-09第３層左方闕の屋上

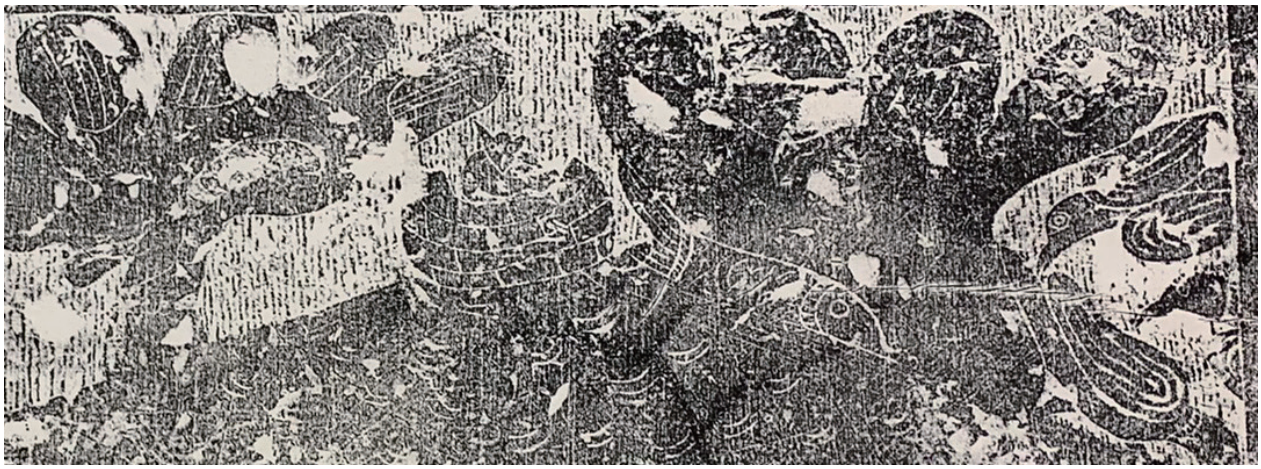

図8　BS-09第３層右側建物屋上と樹木

で類例作品を見いだせていないが、煉瓦（磚）ではなく鴟鴞の巣をあらわしているのかもしれない。建物の軒下両側に外を向く人物がそれぞれ1人ずつ上半身を見せており、低い武冠を被って拱手している。建物の背後に２株の樹木があり、先端が丸く膨らんだ枝を何本も広げている。向かって左の屋根の先端近くに狗が坐っており、反対側の先端には鳥が1羽とまり、その上方にも飛鳥の上半身が2羽見える。向かって右側の屋根の稜線上、鳥の後ろに右向きの魚が1尾確認できる（図8鴟鴞の右側）。魚は画像石中によく表現されるが、この場合は屋上にあり、左右対称ではないため建築装飾には見えず、なぜ屋根の上に魚が表現されているのか今のところ合理的な説明がつかない。向かって右の塀の上に尾の細長い四足獣が坐っており（**図9**）、小さな耳のある頭部や体型から猫ではないかと思われる。塀の右下隅には頸の長い鳥、左下には鶏冠のある鶏がいる。建物と闕の間、第３層のほぼ中央には上広がりの台形に笠を載せたような形の物体が上下に１つずつあり（**図10**）、上方の囷の屋上には鳥と猿猴、下方の囷の屋上には2鳥がとまり、下方の囷の右下には右方建築の左右にいるのと同じ武冠を被り拱手する人物が立っている。

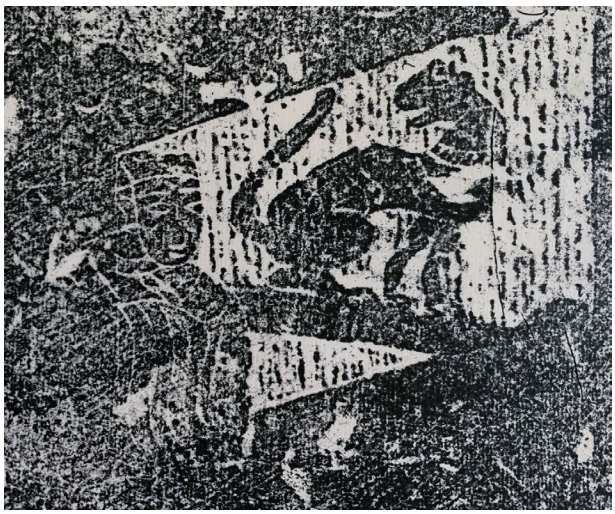

図9　第３層右側建築軒下の人物と塀上の獣

この右方の塀付き建物について、台湾の中央研究院歴史語言研究所（以下、史語所と略称）が同じ画像石拓本の解説で「穀倉」としているが特に根拠は記さない[註11]。また同解説では中央の上下に配置された物体を「酒樽」と記述しているが、大きさが周囲の人物や鳥獣と釣り合わない。漢時代の明器の穀倉（**図11**、当館會津八一コレクション AY-M-183）の側面観と形状が酷似していることから、円筒形の穀倉（囷（きん））をあらわしていると考えられる。上に向かって徐々に広がる円筒の上部に円錐形の軒の出た屋根があり、上部につまみのような立ち上がり部分がある点は一致する。軒先に円弧線が数個確認できることから瓦葺と考えられる。明器の囷は図11のように３本足があるのが通例のようで、そこは拓本の物体と異なる点だが、足をつくらず平底の囷もある[註12]。明器だけでなく、実際に先秦時代の遺跡から円形の穀倉と推定される痕跡も発掘されており、直径は数メートルから10数メートルまであるため、少なくとも人より大きい[註13]。さらに拓本では、周囲に鶏や狗があらわされているが、これらは後漢画像石・画像磚では厨房や農作業の風景中によく見られる図像であり、塀の上の獣が猫であれば鼠捕りのために飼われ

ていると考えられることから、大きな建物もその左側上下に配置された物体もいずれも穀倉や納屋などの食糧・農作業に関係する建造物である可能性が高い。なお史語所の解説でも右上の塀上に坐る獣を「貓」（ねこ）と記している。飼猫は中国では「家狸」「狸奴」「狸狌」などと表記され、すでに戦国時代から飼育され、鼠を捕るため重宝されていたことが知られている[註14]。ただ、これまでの画像石研究では猫の図像についてほとんど言及されていないようである。

さて、本拓本BS-09と同じ画像石の拓本は、1950年に出版された巴黎大学北京漢学研究所編『漢代畫象全集』初編（図273）に掲載されているほか[註15]、魯迅（1881～1936）が収集した画像石拓本（北京魯迅博物館・上海魯迅紀念館編『魯迅蔵漢画象（２）』上海人民美術出版社、1991年、図30）に含まれており、台湾の中央研究院歴史語言研究所（以下、史語所と略称）にも収蔵されていることが同所のウェブ公開データベースから確認できる[註16]。『漢代畫象全集』の解説と史語所データベースは出処について山東と記すのみだが、『魯迅蔵漢画象（２）』は魯迅自身の注として「郭氏石室続得画象一枚」と記し、編者は「経査孝堂山郭氏石室未見此石。此拓魯迅蔵両幅、另一幅上注：“肥城孝堂山新出土画象一石。”鈐有“会稽周氏収蔵”印一方」と注して、題名を「肥城孝堂山新出土画象」としている。編者のいうように、この石は現在地上の祠堂の遺構として残る孝堂山石祠画像石の中には含まれていない。しかし、孝堂山下で発見された画像石とは様式上きわめて近いことが指摘できる。次章ではその孝堂山下出土石祠画像石をはじめ、様式的に近い画像石拓本を取り上げ、本図と比較検討したい。

図10　BS-09第３層中央部の穀倉

図11　明器の穀倉　当館蔵 AY-M-183

2. 類似する様式の画像石拓本

前章で見てきた画像石 BS-09と図像様式が近い画像石拓本には、以下のようなものがある。

①孝堂山下石祠画像石　山東省済南市長清区孝堂山下出土　東京国立博物館所蔵

関野貞『支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾』（東京帝国大学、1916年、以下『関野』と略称）によると、関野氏が明治40年（1907）に中国山東省の建築遺構を調査した折、孝堂山石祠のある山の東北麓で四魚と双鳳を刻した画像石２面が土中より半ば露出しているのを見たが発掘している時間がなく、その後済南府で蔵田信吉氏に話したところ、氏は知県と土地所有者の承諾を得て発掘し一小石祠を得たという。それは後壁石と左右側石、その上を覆う蓋石とよりなるもので、それを蔵田氏が翌明治41年に日本へ将来し、四魚を刻した石以外は東京帝国大学工科大学の所蔵になった[註17]。現在は東京国立博物館の所蔵となり、孝堂山下石祠として東洋館に展示されている（**図12**）[註18]。孝堂山石祠は現在の山東省済南市長清区にある。彫刻技法は BS-09や武氏祠画像石などと同じで、図像の背景を浅く削って縦の細線を刻み、図像は平滑に磨き、人物の目鼻口や衣などの内部の描線を細い陰刻線で緻密に刻んでいる。本章で取り上げた BS-09画像石の類似作品はすべてこれと同じ彫刻技法のものである。

このうち BS-09と特に近いのが後壁の第１層・第２層に位置する車馬出行図、右側石正面の第２層に位置する建物である。後壁は上下四層に区画され、上２層が向かって右から左へ進む車馬出行図である。第１層前方の馬（**図13**）、後方の馬（**図14**）と BS-09前方の馬（**図15**）を比較してみると、頭部の輪郭、前髪を括ったと思われる先端が丸く膨らんだ角状の突起、左前足の膝関節のこぶのような膨らみがほとんど同じ形状である。目の形状は上瞼の線がやや異なるが、アーモンド形で中心に円形の黒目を入れる点は似ている（**図16**、**17**）。

左右側壁の内側と正面は４層に区画され、右側壁正面第２層に塀付きの建物がある（**図18**）。これは斜めに俯瞰した構図、瓦葺屋根の表現、頂部の迎月形の装飾、向かって左下に這う姿勢の獣などが BS-09第２層左方の建物（**図19**）と一致し、第３層右方の建物とも近い。

また、後壁第２層の後方の馬の上空に浮かぶ蟾蜍（**図20**）は、BS-09後方馬車の馬の上方の蟾蜍（**図21**）と体勢が近く、輪郭線や頭部の形状もよく似ている。ただ、孝堂山下石祠では全身に細かく点を打っているのに対し、BS-09では短い横線を数か所引くだけという差異も見られる。

さらに、後壁第４層向かって右側の樹木は枝葉の先端が膨らんでおり、BS-09第３層の2本の樹木（図8）と近似している点もあるが、枝が細く絡まり合っており、相違点も多い（**図22**）。なお、孝堂山下石祠も BS-09も鳥が多数あらわされているが、孝堂山下石祠は翼の肩の部分に鱗状の羽毛の表現が刻まれ、BS-09にはその表現は見られない。

図12　①孝堂山下石祠画像石　東京国立博物館蔵

図13　①孝堂山下石祠後壁第１層前方の馬
早稲田大学図書館蔵

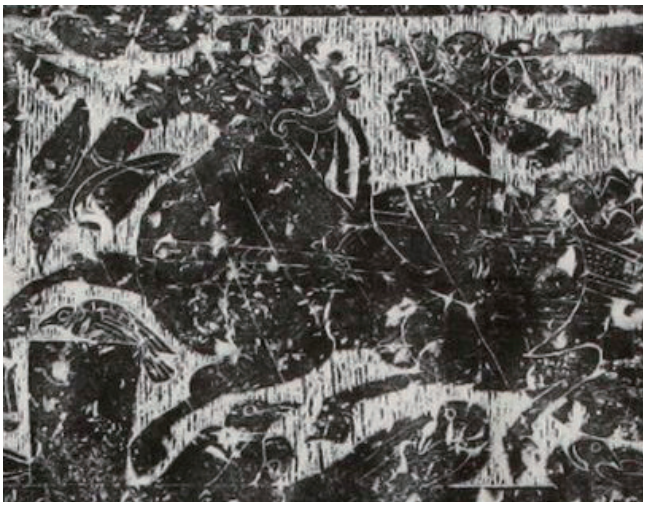

図14　①孝堂山下石祠後壁第１層後方の馬
早稲田大学図書館蔵

図15　BS-09第１層先頭の馬

図16　①孝堂山下石祠後壁第２層前方の馬の目
京都大学人文科学研究所蔵

図17　BS-09前方馬車の馬の目

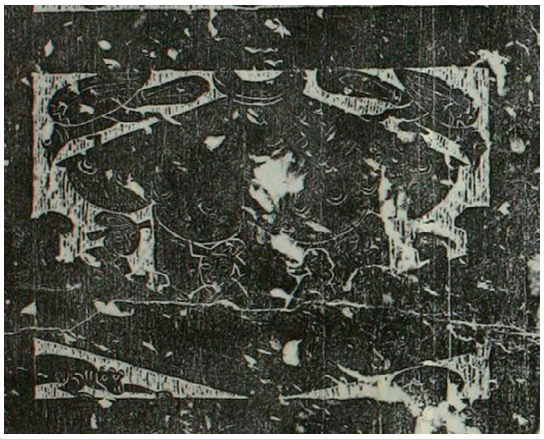

図18　①孝堂山下石祠右側壁正面第２層の建物
早稲田大学図書館蔵

図19　BS-09第２層左方の建物

図20　①孝堂山下石祠後壁第２層の蟾蜍
早稲田大学図書館蔵

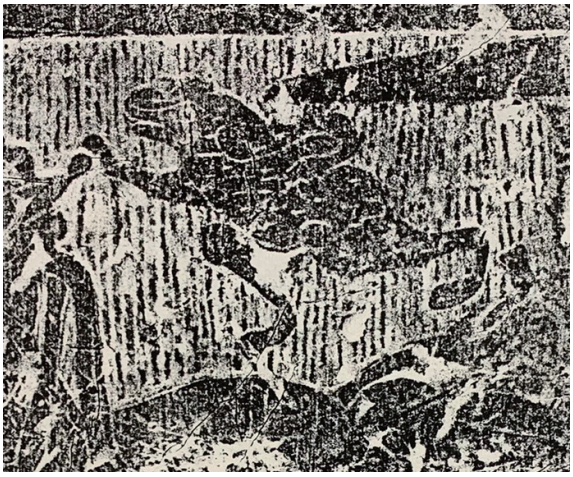

図21　BS-09第１層の蟾蜍

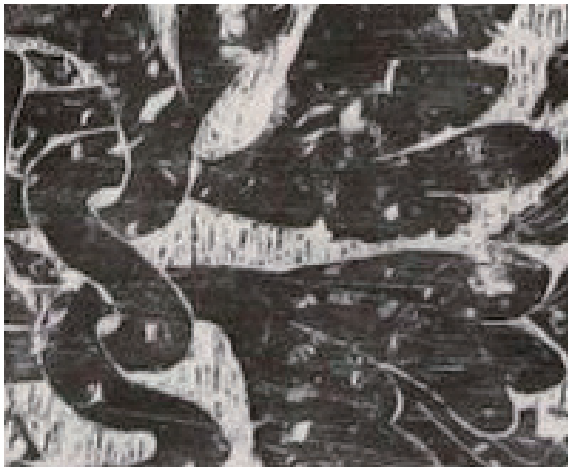

図22　①孝堂山下石祠後壁の樹木　早稲田大学図書館蔵

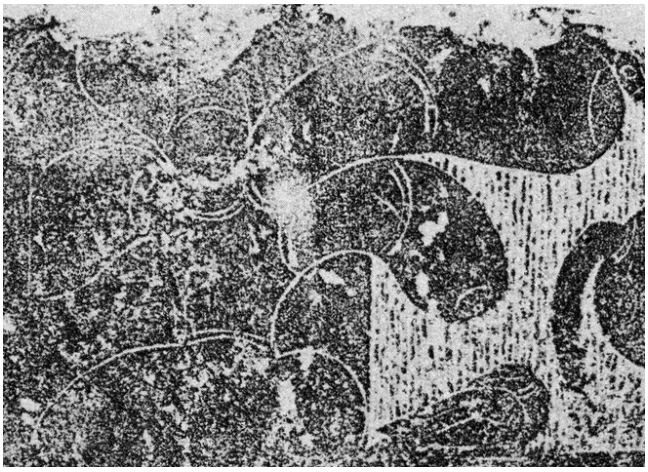

図27　③皋陶陳子禽画像石の樹木

このように、孝堂山下石祠とBS-09は細部の彫り方に微細な差異は見られるが、ほとんど同じ形状の図像が見られ、その作者は同一人物とまではいえないが、少なくとも同じ彫刻者集団に属するものと推測される。

②鉤騎四人画像石　山東省嘉祥県出土

この画像石の拓本は、『関野』附図113第213図「潘祖蔭蔵画象石」（**図23**）、北京魯迅博物館・上海魯迅紀念館編『魯迅蔵漢画象（２）』（上海人民美術出版社、1991年）図221「山東画象」、『漢代畫象全集』初編の図197、朱錫禄編著『嘉祥漢画像石』（山東美術出版社、1992年）図38「鉤騎四人画像石」に掲載されている。『漢代畫象全集』および朱錫禄氏の解説によると、この石は早期に嘉祥県某所で出土し、発見後は呉県の藩祖蔭、ついで端方、黄県の丁樹楨に帰し、現在はスウェーデン国立博物館の所蔵であるという[註19]。

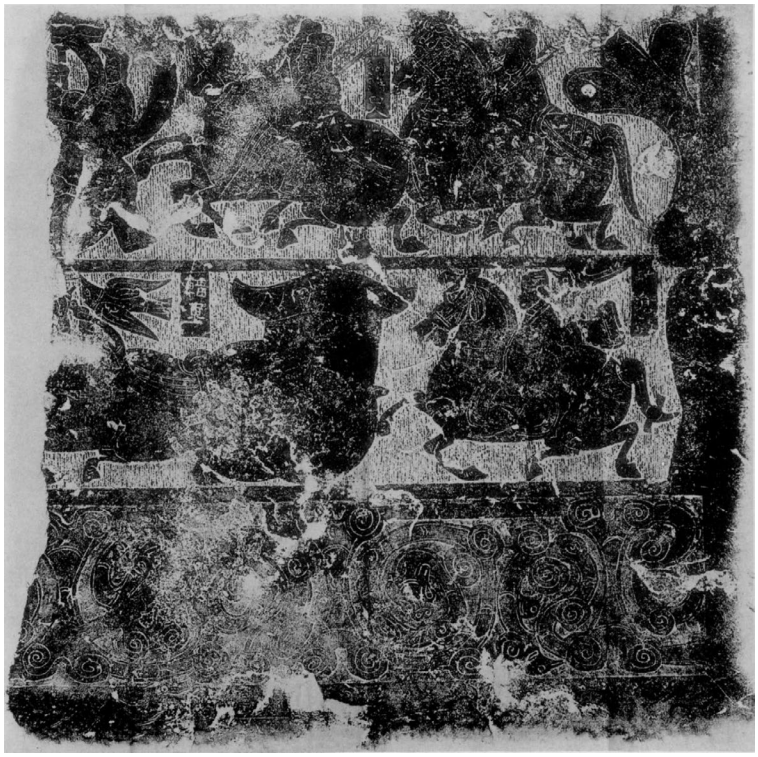

図23　②鉤騎四人画像石

画面は３層に区画され、上２層は車馬図、第３層は雲文帯である。馬の頭部輪郭、目の輪郭、前髪をくくった表現、左前足の曲げた膝の膨らみなどの表現がBS-09や①孝堂山下石祠と共通するが、蹄に横線が数本入り、尾の先端に装飾が付いていることなど異なる部分もある（**図24**）。また第１層の右端に樹木があり、３つに分かれた枝葉の先端が大きく丸く膨らんでいる点はBS-09第３層の樹木と類似する。第３層の文様帯は渦巻き状の雲文で先端が獣頭になっており、ところどころに小さい渦がついている。①孝堂山下石祠の文様帯も渦巻き状の雲文だが、獣頭はなく、楕円形を描いており、異なる文様に分類される。

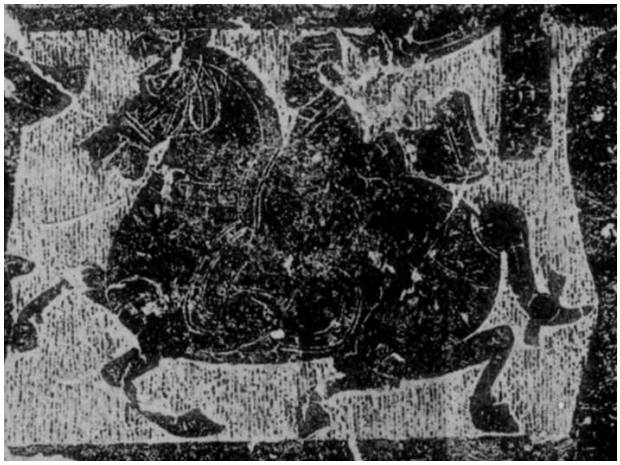

図24　②鉤騎四人画像石第二層後方の馬

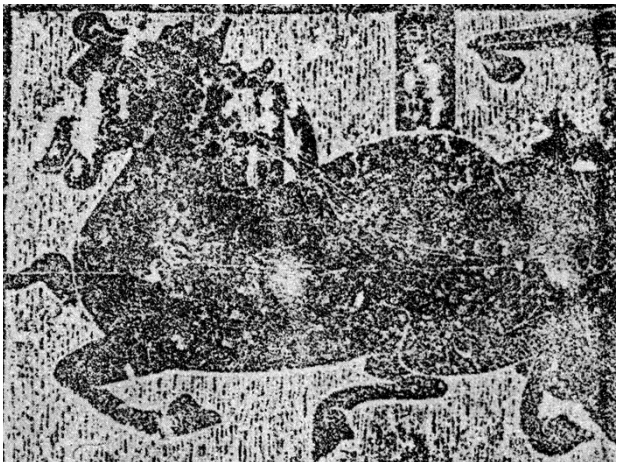

図26　③皋陶陳子禽画像石第二層の馬

③皋陶陳子禽画像石　山東省嘉祥県出土

この画像石の拓本は『漢代畫象全集』初編図198、『魯迅蔵漢画象（２）』図220「山東画象」（**図25**）、朱錫禄編著『嘉祥漢画像石』図39「皋陶陳子禽画像石」に相当する。『漢代畫象全集』および朱錫禄氏の解説によると、この石は早期に嘉祥県某所で出土し、発見後は黄県の丁樹楨に帰し、②鉤騎四人画像石と同じく現在はスウェーデン国立博物館の所蔵であるという[註20]。

図25　③皋陶陳子禽画像石

画面は上下４層に区画され、第１層は馬と人物、第２層は車馬、第３層は文様帯で渦巻状の雲の渦の先が獣頭になっている。第４層は左向きの人物行列で、いずれも進賢冠と思われる冠をかぶっている。第３層の文様は①とも②とも異なる。馬の形状も①②ほど似ていないが、第１層の馬は目の形、第２層の前方の馬は前髪を括っていることや全体の形が類似する（**図26**）。また第１層左端の樹木（**図27**）は枝分かれした先端が大きく丸い点がBS-09や①②の樹木と近い表現であるが、内部の刻線はBS-09（図8）が縦線を数本刻むのに対し、横線が等間隔に入っている。

④出行・迎客画像石　山東省泰安市乾家堡出土

この画像石の拓本は『漢代畫象全集』２編図2・3、『魯迅蔵漢画象（２）』図148・150、京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料「画像石」データベースのA07-08（**図28**）・A07-06、『中央研究院歴史語言研究所蔵漢代石刻画象拓本目録』334（左１・右１）に掲載されている[註21]。前章で取り上げた図3は車馬行列の先頭部分で、馬の頭部を含めて全体の輪郭、前足の膝が膨れていることなどがBS-09と共通する。しかし、膝の膨らみの形が微妙に異ななり、前髪は括られておらず細長く立ち上がり、蹄に横線が2本入るなど、相違点も多く見られる。

⑤出行・迎客画像石　山東省泰安市乾家堡出土

この画像石の拓本は『漢代畫象全集』２編図4・5、『魯迅蔵漢画象（２）』図149・151、京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料「画像石」データベースのA07-07・A07-09（**図29**）、『中央研究院歴史語言研究所蔵漢代石刻画象拓本目録』334（左２・右２）に掲載されている。馬の形状を含めて様式的に④とほぼ同じである。

⑥周公顔淵子露画像石　山東省泰安市出土

この画像石の拓本は『関野』附図114第215図「周公顔淵子露画象石」に掲載されている。京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料「画像石」データベースのA07-10も同じ石の拓本である。関野氏によると原石は『校碑随筆』によれば山東省泰安より出土し、済寧に移された後ドイツ人アドルフ・フィッシェルが購入して明治40年（1907）

図28　④出行・迎客画像石の馬
京都大学人文科学研究所蔵

図29　⑤出行画像石の馬　京都大学人文科学研究所蔵

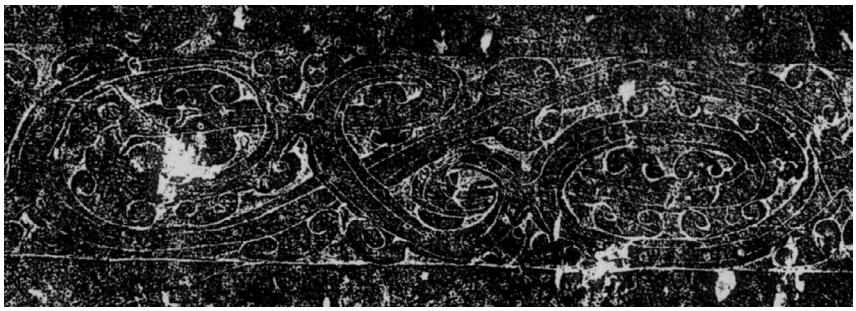

図30　⑥周公顔淵子露画像石上部右側中央の文様

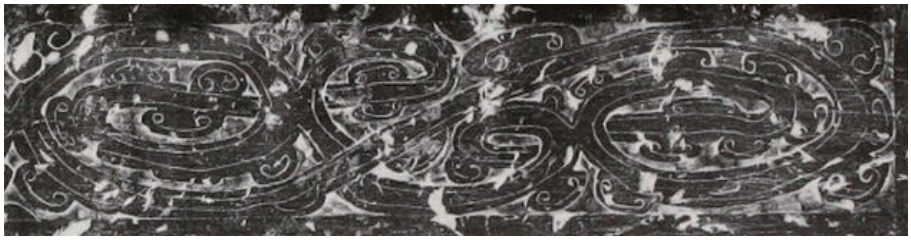

図31　①孝堂山下石祠後壁第４層右半部の文様　早稲田大学図書館蔵

にドイツに運び去られたという。画像内容は孔子見老子画像の一つで、その他題記を伴う孔子の弟子たちが並んでいる。関野氏により上部の文様帯の雲文（**図30**）が①孝堂山下石祠の文様（**図31**）と似ていることがすでに指摘されているが、蔓草の小さな芽のように付き出た小さな渦巻きの刻線の形が異なるだけでほぼ同じパターンを示している。馬車が1台あるが、馬の図像は不明瞭で、足の形は立ち止まる形のため比較できない。

3. むすびにかえて

以上、新規に受贈した画像石拓本 BS-09について、類似する画像を確認してきた。この拓本の画像石原石は現在所在不明で、海外に流出した可能性が高い。しかし、魯迅旧蔵拓本に孝堂山（現在は済南市長清区）で新出したという情報が残ること、特に彫刻技法上も図像的にも①孝堂山下石祠画像石ときわめて近い関係にあることから、もとは①とともに孝堂山下にあり、関野貞の指摘によって①が発掘された時に発見された可能性は高いと考えられる。また、類似する特徴をもつ画像石が長清区の南に隣接する泰安市と、泰安市の南西に位置する済寧市嘉祥県からも出土していることから、山東省内でも比較的近い範囲に同じ様式の画像石が分布していたといえるのではないだろうか。

画像の内容については、画像石に表現された困の他の作例を見いだせていないことや、塀付きの建築の名称･用途、これらの図像を墓室あるいは祠堂にあらわす意味など、解明できていないことも多いため、今後の課題としたい。

〔謝辞〕

本拓本については、漢代美術の専門家である女子美術大学の楢山満照氏に画像を送り伺ったところ、孝堂山下石祠は散逸しているのでその一つである可能性が高いのではないかという見解を示され、同類の建物が見えることも指摘された。末筆ながら記してご教示に感謝申し上げる。

〔付記〕本研究は JSPS 科研費 JP22H00620の助成を受けたものである。

註

(1) 京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料（データベース）、画像石
http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/g_menu.html

(2) 林巳奈夫「漢代男子のかぶりもの」『史林』46-5、1965 年。

(3) 林巳奈夫「後漢時代の車馬行列」（『東方学報京都』37、1966 年、のち岡村秀典編『中国古代車馬研究』第7章〔臨川書店、2018年〕に収録）による。

(4) 前掲註3で林氏は泰安乾家堡画像石の他に、山東省嘉祥県武氏祠前石室第五石の車馬を見送る人物に現在は見えないが『金石索』によれば「此亭長」の題記があったこと、望都一号漢墓の前室南壁に「門亭長」の題記があることを紹介している。

(5) 瞿中溶「武氏前石室画像攷」（『漢武梁祠画像考』浙江人民美術出版社、2019 年、437頁）

(6) 『後漢書』中華書局標点本、2759 頁。

(7) 林巳奈夫前掲註3、622～623 頁。

(8) 林巳奈夫前掲註3、630 頁。

(9) 巴黎大学北京漢学研究所編『漢代畫象全集』初編（学苑出版社、2014 年：1950 年出版の復刻）図273 の同じ画像石の拓本解説では、この榜題を「□史車」と読んでいるが、同書の写真では文字は潰れて判読できない。

(10) 山東省沂南画像石墓の中室北壁上段西半の車馬行列図の先頭近くの馬車の下に円筒形の台が２つ俯瞰した形で描かれており、これと同類のものかもしれないが、沂南画像石墓には器が見当たらない。『中国画像石全集』1山東漢画像石（山東美術出版社、河南美術出版社、2000 年）図207、林巳奈夫前掲註3書第7章図4参照。

(11) 史語所數位典藏資料庫整合系統「漢代石刻畫象拓本」（データベース）
https://ihparchive.ihp.sinica.edu.tw/ihpkmc/ihpkm_op?@@1661251281
登録号27068-1 および27068-2 山東畫象六。内容説明は以下のとおりである。「其中下邊的酒樽有一侍者，其旁邊有一雞，右側有一穀倉，穀倉旁有二樹，樹上有一飛鳥，穀倉中有二人觀看，穀倉屋簷有一犬，後方欄杆有一貓，下方有一鳥。」

(12) 丁利娜「河套地区漢代陶明器与周辺地区的比較研究」（『華夏考古』2015-1）。

⑬　陳国梁「困窖倉城：偃師商城第Ⅷ号建築基址群初探」（『中原文物』2020-6）。

⑭　柿沼陽平『古代中国の24 時間』（中公新書2669、2021 年）120 頁、今村与志雄『猫談義 今と昔』（東方書店、1986 年）「7 猫か狸か」66～78頁。

⑮　本書に掲載されていることは、二松学舎大学准教授・松浦史子氏を通じて漢代画像石の専門家である山東省博物館副館長・楊愛国氏にご教示いただいた。なお楊氏はこの画像石の原石・原拓本ともに実見したことがないそうで、やはり原石は早期に中国国外に流出した可能性が高いと考えられる。

⑯　前掲註11。

⑰　関野貞『支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾』（東京帝国大学、1916 年）92～95頁。

⑱　東京国立博物館、鳳凰の画像石は列品番号 TJ-4796-1、後壁・左右側壁画像石は列品番号 TJ-4796-2～4。

⑲　朱錫禄『嘉祥漢画像石』（山東美術出版社、1992 年）115 頁。原文には「今蔵瑞典国家博物館」とある。また図版では確認しづらいが第１層の騎馬の中間に「鉤騎四人」、第２層の車に「輜車」、第２層後ろの騎馬の後方に「騎倉頭」の榜題が残っているという。

⑳　前掲註9『漢代畫象全集』初編197解説、前掲註19朱錫禄116頁参照。また同解説によれば、第１層の人物に「皋陶」「関龍勝」、第２層の車馬に「西部都郵」「東部都郵」、第３層の人物に「王子」「陳子□」「□□□」「□子□」「陳子禽」「□□□」の榜題があるという。

㉑　これらの拓本は所蔵番号が2 つに別れているが、前掲註3 林巳奈夫氏の研究に基づき１つの画像石とみなした。⑤についても同様である。

【図版出典】

図1、5、15　当館所蔵画像（ニューカラー写真印刷撮影）

図2、4、6～10、17　筆者撮影

図3　京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料（データベース）、画像石 A07-08 http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/g_menu.html

図11　当館所蔵画像

図12　東京国立博物館「画像検索」https://image.tnm.jp/image/1024/E0037398.jpg より切抜

図13、14、18、22、31　早稲田大学図書館
https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/i04/i04_03153/i04_03153_b338/ より切抜

図16、20　京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料（データベース）、画像石 A02-10よりコントラスト調整（URL は図3 参照）

図23、24　関野貞『支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾』（東京帝国大学、1916年）附図第213図

図25、26、27　北京魯迅博物館・上海魯迅紀念館編『魯迅蔵漢画象（２）』（上海人民美術出版社、1991年）図220

図28　京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料（データベース）、画像石 A07-08（URL は図3 参照）

図29　京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料（データベース）、画像石 A07-09（URL は図3 参照）

図30　関野貞『支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾』（東京帝国大学、1916年）附図第215図